

(公告)

2006年7月10日

学生のみなさんへ

去る7月7日、本学学生が、母親を殺害した容疑で逮捕されました。これが事実であるならば、先般、本学学生に「強要罪」の判決を下された事件に続く「不祥事」です。他者の生命を脅かす、あるいは破壊するこのような凶悪な事件を本学の学生が犯したことに、深い悲しみをおぼえます。同じこの大阪大学に集う多くの学生諸君もまた、これらの事件に大きな衝撃を受けていないはずはありません。

この二つの事件は、原因や背景は大きく異なるものの、他者の存在に危害を加えたという点で「人」として許されない行為です。事実関係はいま、警察や本学関係学部がそれぞれに詳しく調査をしているところです。この事件については、おそらくは当該学生が育ってきた家族内の事情、当該学生が受けてきた教育のあり方、当該学生を取り巻く社会のあり方など複雑な問題が絡んでいて、どのような経緯でこのような事件が起こったのかを確定するのは、容易なことではないでしょう。みなさんも、ちょっとしたボタンの掛け違えで、こうした事件に遭遇する可能性があったかもしれません。

しかし、このたびの「凶行」はほんとうに避けることのできないものだったのでしょうか。だれもが多かれ少なかれ襲われている「塞がり」や「苛立ち」や「苦しみ」が、このような形でしか解決できなかったとは、到底思えません。

大学というところは、まずは高度な専門的知識を習得するためにあります。が、それと同時に、家庭や地域社会を超えて、「人類社会」全体へと自分の視野を広げるための学習をするところでもあります。自分たちが直面している「問題」を、さらに広い視野のなかで捉えかえすためにこそ、大学での学習はあります。母親の殺害という、取り返しのつかない行為に及んだ学生には、もしこの「凶行」の理由が自身の「塞ぎ」や「苛立ち」や「苦しみ」にあるならば、それらをもっと広い視野から捉えなおす努力をこそ、してほしかったと思います。大阪大学の教育課程がそれに対して無力であったことに、強い悲しみと深い反省を禁じえません。

今回の事件に衝撃を受けているであろうみなさんに強く望みたいのは、それぞれが直面しているであろう「苦境」を衝動的に「暴力」によって解決するのではなく、その「苦境」をもっと別の広い視野のなかで捉えなおすということです。これしかないと思っている「解決」は、たいていは思い詰めたなかでの、性急な狭い考えでしかありません。家族内のトラブルも、ほんとうは家族の内部事情だけを斟酌して済むような問題ではないのです。もっと大きな文化や社会のあり方のなかに深く根を張っている問題です。そのようにして個人的な問題をより広い視野から捉えなおし、生き方のさまざまな可能性を知るためにこそ、大学での学習はあります。また、「問題」を独りで抱え込まずに、友人に、教員に、学生生活相談室の職員に気軽に相談にのってもらうことも大切です。大学という場所では、「わたしの存在こそ社会問題である」と堂々と言っているのです。ではその社会問題をどのように解決するのか、それを学ぶのが大学ということなのです。

そのためには専門の学習に閉じこもるのではなく、みずからの視野を広げるために、本学の学部・大学院が開いているさまざまな教育のプログラムを本気で受けていただきたいと思います。また教員の方々にも、それらの教育プログラムに本気で取り組んでいただきたいと思います。この悲惨な事件を機に、大学で学ぶということの意味を、学生・教職員がこぞって、根本から考えなおすことを強く望みます。

大阪大学副学長(教育担当)

鷲田清一